生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属学校教員と大学教員の協働体制の構築（その２）

藤上　真弓[*1]・徳永　真衣[*2]・大塚　進真[*2]・志賀　直美[*3]
久保田大貴[*3]・浦田　敏明[*4]・前田　昌平[*5]・佐伯　英人[*6]

A Consideration for Collaboration System
among two Attached Elementary Schools and the Faculty of Education(II):
To Improve the Quality of Living Environment Studies and the Period for Integrated Studies

FUJIKAMI Mayumi [*1], TOKUNAGA Mai [*2], OTSUKA Yukimasa [*2], SHIGA Naomi [*3],
KUBOTA Daiki [*3], URATA Toshiaki [*4], MAEDA Syohei [*5], SAIKI Hideto [*6]
（Received August 3, 2023）

キーワード：協働体制、生活科、総合的な学習の時間、授業づくり

はじめに

山口大学教育学部では「学部・附属共同プロジェクト」という取組がなされており、教育学部の附属学校教員と大学教員とが連携して共同研究を実践している。筆者らは、筆者の１人の藤上をリーダーとして、2018 年度、2019 年度、2021 年度の３年間、学部･附属共同プロジェクトにおいて「授業づくり支援プロジェクト」を実践した。これらのプロジェクトでは、附属山口小学校と附属光小学校で生活科・総合的な学習の時間を実践研究している附属学校教員と、生活科・総合的な学習の時間に関わる大学教員が、授業を参観し、授業について話し合い、振り返りを行ってきた（藤上ほか，2019・2020・2022a・2022b）。

2022 年度においても、「授業づくり支援プロジェクト」を実践し、附属学校教員と大学教員の協働体制を持続・発展させることにした。

なお、附属山口小学校では 2018 年度に文部科学省の研究開発学校の指定を受け、研究開発課題である「価値の創出と受容、転移をコアにした教科融合カリキュラムの開発～「創る科」の創設を通して～」に取り組み、新教科「創る科」を創設し、本年度（2022 年度）まで、この「創る科」の授業を実践し、研究している。

「創る科」の目標は「価値を創出と受容、移転させる学習を通して、よりよく生きるための基盤となる汎用的スキルを養う。」である（山口大学教育学部附属山口小学校, 2022）。つまり、「創る科」は文部科学省（2018）の『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』に示されていない授業である。

１．プロジェクトの目的と構成メンバーと役割

本稿では「授業づくり支援プロジェクト」をプロジェクトと以下に称する。プロジェクトの１つの目的は、これまで築いてきた協働体制を持続・発展させることである。また、２つめとして、生活科・総合的な学習の時間の本来的な存在意義と現代的意義について議論し、附属学校として提案性のある授業に取り組んでいくことである。プロジェクトの構成メンバーと役割を表１に示す。

＊１ 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻　＊２ 山口大学教育学部附属光小学校　＊３ 山口大学教育学部附属山口小学校
＊４ 山口大学教職センター　＊５ 前 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻　＊６ 山口大学教育学部小学校総合選修

表１　プロジェクトの構成メンバーと役割

氏名	所属	役割
○ 徳永　真衣	附属光小学校	生活科の実践研究
○ 志賀　直美	附属山口小学校	生活科の実践研究
○ 大塚　進真	附属光小学校	総合的な学習の時間の実践研究
○ 久保田大貴	附属山口小学校	総合的な学習の時間の実践研究
□ 藤上　真弓	大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻	総括、企画・運営、連絡調整、 授業改善指導、講師招聘
□ 浦田　敏明	教職センター	授業改善指導
□ 前田　昌平	大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻	授業改善指導、授業記録
□ 佐伯　英人	教育学部小学校総合選修	授業改善指導、調査・分析、効果検証

○：附属学校教員，□：大学教員

２．プロジェクトの概要と研究の目的

プロジェクトでは１回目の活動～ 10 回目の活動（活動①～活動⑩）を 2022 年７月 29 日～ 2023 年１月 27 日に行った。プロジェクトの活動内容を表２に示す。

筆者の１人である久保田はプロジェクトの構成メンバーであり、附属山口小学校において総合的な学習の時間の実践研究を行っている（表１）。久保田は､表２に示した 10 回のプロジェクトの活動中８回の活動（活動①，活動②，活動③，活動④、活動⑤、活動⑥、活動⑦、活動⑩）に参加した。また、その中の３回の活動（活動⑤、活動⑥、活動⑦）において授業を実践し、公開した。活動⑦において、話し合いの題材にした授業のようすを図１に示す。活動③のフィールドワークのようすを図２に示し、活動⑧の話し合いのようすを図３に示す。ちなみに、活動⑧に久保田は参加していない。

本研究の目的は、プロジェクトに参加した久保田の意識を明らかし、プロジェクトの有効性について議論することである。

表２　プロジェクトの活動内容

活動名	月日	活動	参加者	実施場所と形態
活動①	７月 29 日	生活科、総合的な学習の時間独自の見方・考え方を整理して、また、生活科、総合的な学習の時間の見方・考え方と他教科の見方・考え方を比較して話し合った。	志賀、大塚、久保田、藤上	山口小学校・対面
活動②	８月 25 日	生活科、総合的な学習の時間と山口小学校で実施している「創る科」の学びの在り方について、また、両者を関連付けて実践する方法について話し合った。	志賀、大塚、久保田、藤上	山口小学校・対面
活動③	９月３日	山口市中心商店街に出向き、総合的な学習の時間の単元開発のポイントについて、また、子どもと地域の人・もの・ことの出会いの場のつくり方について話し合った。	久保田、浦田、前田	山口市中心商店街及び山口小学校・対面
活動④	９月 13 日	総合的な学習の時間における探究的な見方・考え方について、また、山口小学校で実施している「創る科」の授業づくりにいて話し合った。	志賀、大塚、久保田、藤上	山口小学校・対面
活動⑤	10 月 22 日	山口小学校で実施している「創る科」の授業を公開し、その授業をもとに、「創る科」で子どもに育みたい力について話し合った。また、「創る科」と生活科、	志賀、大塚、久保田、藤上	山口小学校・対面

		総合的な学習の時間で育成する資質・能力の関係について話し合った。		
活動⑥	11 月 9 日	総合的な学習の時間の授業を公開し、その授業をもとに、子どもが探究の原動力を生み出す手立て（支援・指導）について話し合った。	久保田、浦田	山口小学校・対面
活動⑦	11 月 25 日	幼小中一貫教育研究大会において生活科、総合的な学習の時間で公開した授業をもとに、子どもの学びと育ちをつなぐために生活科、総合的な学習の時間が果たす役割について話し合った。	志賀、大塚、久保田、浦田、藤上	山口小学校及び山口中学校・対面
活動⑧	12 月 15 日	附属光学園小中一貫教育研究協議会で公開する生活科の授業づくりについて話し合った。	徳永、佐伯、浦田、藤上	光小学校・対面
活動⑨	12 月 23 日	附属光学園小中一貫教育研究協議会で公開する総合的な学習の時間の授業づくりについて話し合った。	大塚、藤上	オンライン
活動⑩	1 月 27 日	附属光学園小中一貫教育研究協議会の生活科部会、総合的な学習の時間部会において協議した授業の動画をもとに、生活科、総合的な学習の時間で育成する資質・能力と「ウェルビーイング」の関係について話し合った。	志賀、徳永、大塚、久保田、藤上	オンライン

マスキング：児童のネームプレート

図１　活動⑦において話し合いの題材にした授業のようす

図２　活動③のフィールドワークのようす

図３　活動⑧の話し合いのようす

３．調査の方法

前述したように筆者の１人の久保田の意識を明らかにする目的で２つの質問紙（質問紙Ａ，質問紙Ｂ）を作成した。

質問紙Ａでは「問１」と「問２」を設定した。「問１」では「プロジェクトの活動後、プロジェクトの活動内容に対するあなたの気持ちを教えてください。質問項目「勉強になった」において、当てはまる番号に○を１つ付けてください。」と記して、質問項目「勉強になった」を設定し、５件法で回答を求めた。５件法は「5：とても当てはまる，4：だいたい当てはまる，3：どちらともいえない，2：あまり当てはまらない，1：まったく当てはまらない」とした。また、「問２」では「問１でそのように回答した理由を書いてください。」と記して、記述欄を示した。質問紙Ａを用いた調査は、８回の活動（活動①，活動②，活動③，活動④、活動⑤、活動⑥、活動⑦、活動⑩）を終了した後にそれぞれ行った。

質問紙Ｂでは「問１」と「問２」を設定した。「問１」では「総合的な学習の時間の『授業を実践する自信の程度』を０％、10％、20％・・・100％の中から１つ選択し、その数値を（　　）に記入して示してください。」と記して、記入欄「（　　）％」を示した。また、「問２」では「問１でそのように回答した理由を書いてください。」と記して、記述欄を示した。質問紙Ｂを用いた調査は、プロジェクトを開始する前（活動①を行う前）とプロジェクトを終了した時（活動⑩を終了した後）に行った。

４．分析の結果と考察

４－１　質問紙Ａについて

質問紙Ａの「問１」と「問２」の結果を表３に示す。なお、「問１」で選択された選択肢が「5：とても当てはまる」であれば５点、「4：だいたい当てはまる」であれば４点、「3：どちらともいえない」であれば３点、「2：あまり当てはまらない」であれば２点、「1：まったく当てはまらない」であれば１点とし、これを表３において「意識」と表記した。表３の「意識」をみると、各活動における得点は５点であった。このことは、各活動に対して良好な意識をもったことを示している。記述の内容をみると、各活動の話し合いを通して、総合的な学習の時間について理解を深めたり、考えを深めたりしたようすをうかがい知ることができる。

表３　活動に対する意識（「勉強になった」）と記述の内容

活動名	意識	記述の内容
活動①	５点	生活科、総合的な学習の時間における見方・考え方について自身の理解を深められた。特に総合的な学習の時間における探究的な見方・考え方について、これまでの自身の捉え方を改め、新たな認識をもつことができた。
活動②	５点	総合的な学習の時間における探究の過程について理解が深まった。課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という探究の過程ごとに、子どもの意識について整理することで、授業中の子ども姿や言葉を具体的に想像することができた。また、「創る科」との相違点や関連付け方についても明らかにすることができた。
活動③	５点	山口市中心商店街においてフィールドワークを先生方と実際に行うことで街歩きの視点や予想される子どもの気付きについて考えることができた。
活動④	５点	総合的な学習の時間における探究の過程について理解がさらに深まった。探究の過程ごとの子どもの意識の具体を精査し、整理することができた。また、「創る科」の授業で育みたい力について検討することができた。
活動⑤	５点	公開した「創る科」の授業で育みたい力であった「関連付ける力」の構造について考察することで、総合的な学習の時間における「考えるための技法」との関係を整理することができた。
活動⑥	５点	総合的な学習の時間の授業づくりを通して、子どもが自分の思いを強くもつようになるまでの過程について理解を深めることができた。また、子どもが自分の思いを強くもつようになるための支援・指導についても理解を深めることができた。

活動⑦	５点	総合的な学習の時間において、子どもが多様な事象を俯瞰的に見つめる視点が大切であること、また、子どもが自己の生き方を考える視点もって探究的な見方・考え方を働かせることが大切であることを理解することができた。
活動⑩	５点	ウェルビーイングが目指すものは、総合的な学習の時間で育成される資質・能力そのものであることを理解することができた。総合的な学習の時間における学びの姿は、答えのない未知の課題に対し、他者と協働し、課題解決に向かう姿であり、現在、求められている学び方であると理解することができた。

４－２　質問紙Ｂについて

質問紙Ｂの「問１」の結果を表４に示す。表４をみると「授業を実践する自信の程度」がプロジェクトを開始する前（活動①を行う前）に30％であったが、プロジェクトを終了した時（活動⑩を終了した後）に70％になっていることが分かる。このことから､プロジェクトを実践した結果､「授業を実践する自信の程度」が高まったといえる。このことは、「授業を実践する自信の程度」の向上にプロジェクトの活動が有効に機能したことを示している。

質問紙Ｂの「問２」の結果を表４に示す。表４をみると、プロジェクトの終了時の記述に「総合的な学習の時間の探究の過程ごとに、子どもが働かせる見方・考え方について理解を深めることができた。また、授業中、子どもが見方・考え方を働かせた姿や言葉を具体的に想像し、捉えることができるようになった。」という記述がみられる。この記述から、授業中に子どもが働かせる見方・考え方について理解が深まり、授業中に見方･考え方を働かせている子どもの様態を想像し､事前に(授業前に)捉えることができるようになったことをうかがい知ることができる。また、「『想像した子どもの姿や言葉』と『授業における実際の子どもの姿や言葉』を比較し、検討することで、探究的な見方・考え方を働かせることへの理解をさらに確かなものにすることができた。」という記述がみられる。この記述から、事前に（授業前に）想定した見方・考え方を働かせている子どもの様態と授業中の子どもの様態とを比較し、検討することで実践した授業について、見方・考え方を働かせるという視点から内省できるようになったことをうかがい知ることができる。ちなみに、上記の内容は「授業を実践する自信の程度」が向上した要因といえる。

表４　プロジェクトを開始する前と終了した時の「授業を実践する自信の程度」と記述の内容

調査時	自信の程度	記述の内容
開始前	30％	本年度より本校に着任し、附属学校の教員として総合的な学習の時間について実践研究を行うことになった。現時点において、総合的な学習の時間では、子どもが、探究的な見方・考え方を働かせて学び続けることができる授業をつくる必要性を強く感じている。総合的な学習の時間の本質を理解する必要があるため、評価を30％とした。
終了時	70％	本校の教科専任として研究を行う際に最も重要なことは、単元及び授業づくりにおいて子どもが、探究的な見方・考え方を働かせながら学ぶことができる学習を計画し、実践することであると考えている。大学の先生、附属光小学校の先生と話合いを重ねる中で、総合的な学習の時間の探究の過程ごとに、子どもが働かせる見方・考え方について理解を深めることができた。また、授業中、子どもが見方・考え方を働かせた姿や言葉を具体的に想像し、捉えることができるようになった。「想像した子どもの姿や言葉」と「授業における実際の子どもの姿や言葉」を比較し、検討することで、探究的な見方・考え方を働かせることへの理解をさらに確かなものにすることができた。このプロジェクトを通して得られた認識を、今後の総合的な学習の時間の単元構成や授業づくりで生かし、より良い授業づくりを継続して行いたいと思う。そして、このような自身の思いは、常に学習指導要領に示される総合的な学習の時間の本質に立ち返ることに他ならないことに気付くことができた。よって評価を70％とした。

おわりに

本研究では、2022年度の山口大学教育学部の学部･附属共同プロジェクト「授業づくり支援プロジェクト」

を実践し、プロジェクトに参加した久保田の意識を明らかし、プロジェクトの有効性について議論した。

その結果、以下の２つのことが明らかになった。

① 各活動に対して良好な意識をもったことが示された。さらに、各活動の話し合いを通して、総合的な学習の時間について理解を深めたり、考えを深めたりしたようすをうかがい知ることができた。

② プロジェクトを実践した結果、「授業を実践する自信の程度」が高まったことが示され、「授業を実践する自信の程度」の向上にプロジェクトの活動が有効に機能したことが明らかになった。「授業を実践する自信の程度」が高まった要因して「授業中に子どもが働かせる見方・考え方について理解が深まり、授業中に見方・考え方を働かせている子どもの様態を想像し、事前に（授業前に）捉えることができるようになったこと」、また、「事前に（授業前に）想定した見方・考え方を働かせている子どもの様態と授業中の子どもの様態とを比較し、検討することで実践した授業について、見方・考え方を働かせるという視点から内省できるようになったこと」をうかがい知ることができた。

本研究では、前述したようにプロジェクトに参加した久保田の意識を明らかし、プロジェクトの有効性について議論した。プロジェクトに参加した附属学校教員は、久保田の他に、徳永、志賀、大塚の３名がおり、それぞれの意識については明らかになっていない。今後も「授業づくり支援プロジェクト」を実践し、附属学校教員と大学教員の協働体制を持続・発展させ、プロジェクトの有効性について議論する必要がある。

付記

本稿は、山口大学教育学部附属教育実践総合センターによる「2022 年度学部・附属共同プロジェクト～学校危機や困難を乗り越える学部・附属の連携・協働～」に採択された「授業づくり支援プロジェクト」の成果の一部をまとめたものである。

文献

藤上真弓・土井裕美・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利（2019）:「資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究」,『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第 48 号, pp. 19-28.

藤上真弓・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平・岡崎智利（2020）:「資質・能力の育成を図る生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究Ⅱ」,『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第 50 号, pp. 19-26.

藤上真弓・佐伯英人・徳永真衣・大塚進真・志賀直美・小林弘典・浦田敏明・前田昌平（2022a）:「生活科・総合的な学習の時間の取組の充実を図るための附属教員と大学教員の協働体制の構築」,『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第 54 号, pp. 45-54.

藤上真弓・大塚進真・佐伯英人（2022b）:「総合的な学習の時間の授業改善に向けた「授業リフレクション」」,『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第 54 号, pp. 263-272.

文部科学省（2018）:『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』, 東洋館出版社.

山口大学教育学部附属山口小学校（2022）:『文部科学省研究開発学校（最終年次）価値の創出と受容、転移をコアにした教科融合カリキュラムの開発～「創る科」の創設を通して～』, 山口大学教育学部附属山口小学校.